

2021年10月31日 説教「カインの罪」

高橋克樹牧師

聖書 創世記4章1〜10節、マルコ福音書7章14〜23節

創世記4章の物語の最初の舞台はエデンの園ではありません。エデンの園を追われたアダムとエバは辿り着いた地で二人の男子をもうけました。やがて兄カインと弟アベルは成長し、兄は農民、弟は羊飼いになりました。ある日、二人は神に献げ物をしましたが、神は弟アベルの献げ物には目を留められたが、兄カインのそれは顧みられなかった。神がなぜ弟の献げ物だけを顧みられたのか？ その理由は何も書かれてないので、分かりません。兄カインはこれに怒りを爆発させ、弟アベルを殺してしまいます。神が殺人行為を問い詰めたので、カインは神の前で生活することができなくなり、彼はエデンの東に住むこととなります。

この物語を解釈する上で焦点をどこに置くかが重要になります。一つは兄カインによる弟アベルの殺害行為に焦点を絞り、兄弟間の社会的・心理的葛藤の物語として読む方法があります。次に遊牧民（アベル）から農耕民（カイン）への生産手段の移行期における対立の視点で読むこともできます。しかし、第三の視点としては、エデンの園追放物語（3章9〜24節）との類似性の中で読む方法があります。この場合、物語を導入する設定こそ違つてはいませんが、物語の展開・構成は非常に似ています。「あなたは」どこにいるのか」（3章9節と4章9節）、「なんとということをしたのか」（3章13節と4章10節）、「土は呪われる」（3章17節と4章11節）、「土ないし大地の不毛」（3章18節と4章12節）、「追放」（3章24節と4章14節）、「保護」（皮の衣3章21節とカインのしるし4章15節）、「エデンの東」（3章24節と4章16節）と、共通点は非常に多いのです。一方で、この二つの物語に共通する疑問は「なぜヤハウエは楽園の中央に禁断の木の実をつけた木を植えたのか」「なぜヤハウエはアベルの献げ物だけを受け取つて、カインの献げ物は顧みなかったのか」。実はこの疑問は最後まで解決されていないことが重要なのです。このことが示していることは、人間には「神の意志を問うことのできない領域」があるということを示しているのです。

この物語が誕生した背後には、信仰者にとって「人間の運命をつかさどる神の意志が不条理であることが我慢ならなかった」ことにあるのではないかと推測できます。その思いがにじみ出ている物語と言えます。なぜなら、神が明白な理由なくしてカインの献げ物を顧みられないという問題の種を蒔いたから事件は起こった、とも言えるからです。自分が直面した理解しがたい事態の原因が見いだせないとき、人間は果たして神の善意を信じていることができるのか。因果報論で説明できない事態をどう理解し受容するのか。そもそも因果報論

の認識の仕方、原因と結果を結びつけて、結果を理解する思考方法に隠されている人間の自己中心的な思いに問題があるのではないか。

やや結論的に言うと、兄カインには不条理に向き合う力がなかったのです。自分のとって不条理だからこそ、それにどのような態度で臨むのか。その不条理をどのように受容し、認識するのか。自分にとって都合のいいことだけが果たして自分を形づくっているのか。いやそうではあるまいと受け止めて人生を生き抜いていくことの大きさを物語っているのではないか。不条理もまた自分という人間を形づくっている不可欠な要素として受け止めて、人生に神のみ業がどのように働いているのかを見い出す力を養うことが求められているのです。

どのようにして不条理を自らの内に受肉化するのか。人生におけるマイナスの事柄を自己物語に組み込むための詩人のキーツが語った「負の受容力」をいかに涵養するか。そういう信仰の根本問題が問われているのではないか。一般に人は因果律で世界が成立すべきだと考え、それによって世界は安定していると理解しがちです。それは了解しがたい事柄に満ちていると感じてしまうと、その世界で生きていくのは辛くなるからです。だから、人は自分が不条理な運命に出会ったときは七転八倒してしまうのです。そのような視点でこのカインとアベルの物語を読み解くと、不条理な出来事に直面したとき、人間が取るべき行動と、神理解をどのようにするかという根本的な問いをこの物語は提出していると考えられます。

1節の『知った』（ヤード）という言葉は人間同士の深い心身上的つながり、人間同士が誠実な関係性を結んだということを意味している言葉です。エデンを追われたアダムは自分が死すべき存在であることを悟り、自分の生命を次代に伝達する希望を託す存在としてエバ（「生命」の意）を知ったのでした。ただ、エバは1節で『わたしは主によって男子（イーシュ）を得た（カーナー）』と語っている。イーシュは一般的には「人」と訳すので、「息子」や「夫」と訳すことは難しい。「わたしは主によって人を得た」という意味です。カーナーは創造を意味するので、エバは出産によって、これまで神が行っていた人間の創造を自分自身で成し遂げたという思いが生じたのかもしれない。4節『主はアベルとその献げ物には目を留められた』とあるように、ヤハウエは、アベルとその献げ物の両方に目を留めている。『目を留める』（シャヤー）の原意はただ単に「見つめる」という意味で、ヤハウエがアベルの献げ物だけを「是認した」「承認した」というようには解釈できません。おそらくアベルとその献げ物に関心を向けたが、カインとその献げ物には興味を示さなかったという程度の意味合いでしよう。あるいは、ヤハウエが親しみのある顔をアベルに向けたということとだったかもしれません。その程度の違いなのです。5節『カインとその献げ物には目を留められなかった』とありますが、物語はこのあとヤハウエが目を

留めなかったカインを中心に展開していくのです。カインは「なぜ自分と自分の献げ物にヤハウエが目を留めなかったのか」について、その事実を不条理として受け止めた自分自身の内面に目を向けるべきであったのです。カインは自己への洞察力を深めようとする力が弱かったために、弟に対する嫉妬心が生まれ、その嫉妬心が殺人へと進展していきます。少なくとも神の試みとして受け止めるならば、アベルを殺害することによって、自分の怒りを解消しようとはしなかったはずで、5節の『顔を伏せた』は文字通りには「顔が落ちた」です。この表現が意味していることは、カインが自らの意志で顔を伏せ、神との関係を断ったのではなく、無意識のうちに顔が落ちてしまつて、神との関係性が切れてしまったことを暗示しています。つまり、カインは自分の内面に起こった感情の動きに自分自身では気づいていないのです。このことが人類最初の殺人を誘発したのです。つまり、彼は何も自分自身について知ろうとしていないのです。

7節『もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか』は、「もし、あなたが正しく振る舞おうとするならば、上げることだ」と訳すると意味がより明確になります。新共同訳は、カインは自分が「正しいならば、堂々と顔を上げることができるのではないか」という条件文になっていますが、彼はまだ殺人を犯していません。ヤハウエはここでカインが今後正しく生きていくためにはまず顔を上げることからスタートすべきだと語りかけているのです。ヤハウエは怒りを支配する（コントロールする）ことを促すのです。7節後半の『お前を求め。お前はそれを支配せねばならない』は「彼はお前を求め、お前は彼を治めるのだ」と訳するのが原文に忠実な訳です。ここでの「彼はアベルを指しています。伝統的にはこの「彼」を「罪」のことだと理解して訳されてきましたが、「罪」は女性名詞なので「彼」を受けることができません。また、「罪を治める（コントロール）」という考え方は古代イスラエルの罪に対する考え方と合致しません。なぜなら、罪とは人間の意志では操作不能な本性の部分だからです。11と12節『土よりもなお、呪われる』は「土からの呪い（を受ける）」とも訳することができ、そのように訳すると12節の『土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない』に合致します。農民カインにとつては、大地が収穫をもたらさないというのですから、これは死の宣告に等しい言葉です。カインにとって大地は仕える対象なのです。この地に仕えることは、この地がカインにとって愛を注ぐ対象であるということを示しています。しかしもはや、愛を注ぐようにも、カインに応えるものはない。ゆえに、ヤハウエは『お前は地上をさまよい、さすらう者となる』と言うのです。しかし、ヤハウエは「カインのしるし」（15節）をつけて、「ご自分の保護の対象にしたのです。人間にとって不条理な出来事を受容していく力が求めら

れているが、神は常に保護の対象にしているのです。

この人類初の殺人の物語は、現代の信仰者に次の事を示唆しているのではないでしょうか。神のことを信じていても、信仰者には神が自分のことを保護していないかもしれないと一瞬思ってしまう不条理な出来事が起こります。それを神が自分に目を留められなかった出来事と理解してしまうと、神の存在が疎ましいものに感じられたり、神の導きを感じられなくなりがちになります。自分にとって不条理な出来事の中に、神のみ業がどのように働いていたかを知ることがひつようとなるのです。自分にとって不条理な出来事と受け止めていることがある限り、自分を憐れむ感情に支配されてしまいます。

神学生2年生のときに、ある講師が『あなたが信仰を持つ前に神の導きがあったと思いますか』と問うてきたことがありました。神との信頼関係が築かれていない信仰以前に果たして神の導きがあったのか、なかったのか、神学生は皆、頭を抱えてしまいました。でも、その講師は「神は全能なのですから、人間が信仰を持っていなくても、神の導きがあるに決まっているじゃないですか」ときっぱりと言われたのです。この神認識は衝撃でした。神を信じていなくても、神は導きを与えている！ただ、人間の方が神に対する信頼を実感していかないだけだということです。カインはまだ神に対して明確な信仰を持っていません。でも神はカインにも目を留められていたのです。たまたま献げ物を差し出した時、弟アベルに目を留められたことを見てしまったのですが、それと同じように自分にも神が目を留められることを勝手に期待してしまつたために、自分に神は目を留められなかったと考えるてしまったのです。神に出会う前に経験した不条理な出来事を悲しむことより、その信仰以前のことを神の導きがどのように為されたのかを見い出す視点で見つめ直さなければ、いま現在の神の導きにも目を向けることができなくなります。逆に、自分が犯してしまった事柄があったとしても、神はカインを守るために「カインのしるし」をつけたように、信仰以前でも、信仰を捨てたかに思えるときでも、神は導いておられることに気づくべきなのです。この意味において、カインの罪は神の導きを見い出さなかった者のことを指していると言うことができます。